

出エジプト記24章 「主のもとへ上る」

1A 神との契約1-8

1B イスラエルの礼拝 1-2

2B 血による契約 3-8

2A 神の栄光 9-18

1B 麓での食事 9-11

2B 山の上の雲 12-18

本文

出エジプト記 24 章を開いてください。私たちは、出エジプト記において大きな分岐点を通じています。分岐点とは、シナイ山の麓に到着するまでの出来事と、そこからの出来事です。イスラエルの民がエジプトから連れ出されて、シナイの荒野の旅をした 1 章から 18 章までが前半です。そしてシナイ山の麓で、主ご自身が天から降りて来られてご自分の言葉を与えられ、また栄光を示されました。それが 19 章以降です。19 章で主が天から降りて来られて、20 章で十戒を与えられ、21-23 章で主はいろいろな定めを、モーセを通して与えられました。そして 24 章に入ります。ここでは、主とイスラエルの民が契約を結び、そしてイスラエルの山に少し近づいて神を礼拝する所に入ります。その後、25 章に主がモーセに幕屋を造ることについての定めを与えられます。

出エジプトの学びをしようと思ったきっかけは、「この世においてキリスト者として生きる」ということでした。エジプトは世を表していると言えます。そこからイスラエルの民が贖い出され、神の民とされるのですが、私たちが同じように世から贖い出され、神の所有の民となっています。そこで大事なのが、「礼拝」です。礼拝は神にひれ伏すことであり、この方の栄光を仰ぎ見ることです。24 章から私たちは、その本質的な部分に入ります。25 章以降に、神の幕屋の設計についての教えがありますが、そこを見たら、まるで建物の設計士の図面を見ているかのような説明です。どの映画でも、出エジプトの映画はあっても、幕屋についての映画はありませんね。敵から救われることは劇的であり、目を見張るものがありますが、神を礼拝し、その栄光を眺めることについては、見ても何も面白いものはありません。けれども、これこそがもっとも大きな喜びであることを、我々、信仰者は知っています。日々の生活を歩んでいく中で、実は人目には付かない、主への礼拝の営みが、私たちが霊的に生きていくうえでの要になります。

1A 神との契約1-8

1B イスラエルの礼拝 1-2

1 主はモーセに言われた。「あなたとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は、【主】のもとへ上って来て、遠く離れて伏し拝め。2 モーセだけが【主】のもとに近づけ。ほかの者

は近づいてはならない。民はモーセと一緒に上って来てはならない。」

モーセは今、20章の後半から主に語られていることを聞いて行って、23章の最後まで聞き、それでここで主のところから離れて、民に語りに行く場面です。主が十戒を民に与えられた時に、雷鳴、稲妻、角笛の音、煙る山を目の前にして身震いして、遠く離れて立っていました。そしてモーセに、「あなたが私に語ってください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお語りになりませんように。さもないと、私たちは死んでしまいます。」と答えたのです。それで、モーセが神のおられる黒雲に近づいて行きました(20:21)。

このようにしてモーセは、神と民の仲介者として動いています。これから契約を民が神と結ぶために働きますが、契約における仲介者にもなります。まるで不動産の仲介業みたいな感じですね。ヨブは苦しみの中で、全能者に対して自分が訴えることのできる仲裁者がいてくれたら、と祈ったことがありましたが、神と直接、関わることは、向こうは無限の神で、こちらはちっぽけな人間ですから、やりようがありません。それで仲介者が必要なのです。ヘブル人への手紙は、旧約における神の制度と新しい契約におけるキリストの働きを対比させているのですが、そこに、モーセ以上の仲介をキリストが果たしたことを書いています。この方を仲介者として、私たちは今、神ご自身を礼拝することができます。テモテ第一 2章にこうあります。「2:5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。」

モーセが再び主の山に上がって行く時に、アロンと息子二人、ナダブとアビブが近づきます。この二人は、残念なことに後にレビ記 10章にて、異なる火を幕屋の至聖所の中に持って行こうとして、火で焼かれて死んでしまいます。そしてイスラエルの長老七十人が行きます。彼らがイスラエルの民を代表する人々として近づくのでしょう。そして、主を遠くから伏し拝みます。伏し拝むというのは、膝をつくと言ってもいいですし、自分の尊厳、力、名誉、あらゆるものを降ろして、相手にお捧げすることです。日本の習慣では、「土下座」のことを思い出すといいでしょう。自分自身で生きれば、自分自身に尊厳、力、名誉、富、すべてがあるとと思っています。しかし、それを主ご自身に明け渡すのです。これが礼拝です。

2B 血による契約 3-8

3 モーセは来て、【主】のすべてのことばと、すべての定めをことごとく民に告げた。すると、民はみな声を一つにして答えた。「【主】の言われたことはすべて行います。」

主の全ての言葉、全ての定めとは、20章の十戒、21-23章にある主に定めについてです。これらをイスラエルの民が聞いて、「【主】の言われたことはすべて行います。」と答えています。ちょうど契約書に合意したようなものです。けれども、イスラエルの民がどこまでこれを守れたか？といえますと、実に次にモーセが山に上がっていた40日間も持たなかったのです。麓では、金の子牛

を造って、乱れて戯れていました。新約聖書でも、群衆は、往々にしてヨハネを預言者として受け入れ、イエス様も同じように受け入れていたのに、指導者らの扇動で「十字架に付けろ」と叫んでしまったのですから。

4 モーセは【主】のすべてのことばを書き記した。モーセは翌朝早く、山のふもとに祭壇を築き、また、イスラエルの十二部族にしたがって十二の石の柱を立てた。5 それから彼はイスラエルの若者たちを遣わしたので、彼らは全焼のささげ物を献げ、また、交わりのいけにえとして雄牛を【主】に献げた。

モーセが主の言葉を書き記しています。ここから、書き記すということが行われたことが分かります。今でさえ、私たちは聖書を、神の言葉であると信じていますが、それはどうしてでしょうか？それは、モーセのような預言者が神から聞いたものを、人々に口頭で伝えただけでなく、このように書き記したからです。そこで、モーセの言葉はすなわち、神の言葉でありました。彼が自分の意志で書いたのではなく、主から聞いたことを書いたからです。ペテロも、パウロもこのことを話しています。「Ⅱテモ 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」

そして、山の麓に祭壇を築いています。その築き方について、切り石を入れない石にしなさいということ、主が十戒を語られた後、再びモーセがやって来た時に初めにお語りになりました。そして、イスラエル十二部族を表す十二本の石柱ですね。こうやって、イスラエルがみな、主の前に出ていることを象徴的に表わしています。ヨシュアたちがヨルダン川を渡った時も、川底から石を持って来て、十二個の石を積み上げましたね(ヨシュア 4:8-9)。これは、かつてヤコブとラバンがミツパで契約を結び、食事を食べた時、互いにここを越えないという契約を結びました。そして、石の柱を立てています(創世 31:43-55)。その契約を思い起こすためです。覚えるということは大事です、私たちも定期的に聖餐式をもって、主イエスにある新しい契約を覚えていきます。

それから、全焼のいけにえと交わりのいけにえを捧げています。全焼のいけにえとは、文字通り体の全てを祭壇で焼き尽くすいけにえです。難しい言葉で燔祭とも言います。これは、全てを献げすることを意味します。それから、交わりのいけにえですが、以前の改訂訳では和解のいけにえと呼ばれているものです。英訳では平和のいけにえとも呼ばれます。交わりや平和のほうが、ニュアンスが出ると思います。神と人とが交わっていることを意味します。私たちの礼拝は、主の自分自身をお捧げする意味合いもあり、また、神の豊かさと思いを分かち合っただき、交わるという意味合いもあります。

興味深いことに、若者がこれらのいけにえの準備をしています。主は、初めに生まれた男の子、長子はわたしのものであると宣言されました。彼らを使ったのではないか？と思います。けれども

民数記 3 章 41 節に、代わりにレビ人がその務めを担いなさいと主が命じていますのでそれ以降は、レビ族の者たち、そしてその中でもアロンの直系の者たちが執り行うこととなります。

6 モーセはその血の半分を取って鉢に入れ、残りの半分を祭壇に振りかけた。7 そして契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らは言った。「【主】の言われたことはすべて行います。聞き従います。」8 モーセはその血を取って、民に振りかけ、そして言った。「見よ。これは、これらすべてのことばに基づいて、【主】があなたがたと結ばれる契約の血である。」

モーセは、神とイスラエルの民が契約を結ぶ仲介を行いました。ここから、旧約聖書が「旧約」と呼ばれるようになります。古い契約という意味です。けれども、それは後に主がエレミヤによって、新しく契約を結ぶと約束し、それをキリストが弟子たちにご自身の血によって結ばれると最後の場産の時に宣言されたからです。

まず、主に与えられた先の言葉を、彼らに読み聞かせています。これを、エズラ記やネヘミヤ記を見ると、学者であるエズラが民に読み聞かせて、そしてレビ人がそれを説き明かして、はっきり分かるようにしたことが書かれています。それで彼らは罪が示され、悲しみましたが、主を喜び、力が与えられました。パウロが牧者テモテにも、こう勧めています。「 I テモ 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。」と言っています。

契約とは何か？それは取り決めであり、それを契約を結んだ双方が遵守しますが、元々の意味は、「切り分けて、血を流し、共に食する」というようなニュアンスになっています。創世記 15 章で、アブラハムに対して主が契約を結ばれる時に、牛や山羊、羊を真っ二つに切り裂きました。そして、その間を双方が通ることによって、「もし契約を破ったらこのようになる」ということを表していました。けれども、その時は神が、煙の立つかまどと燃えているたいまつが、その間を通り過ぎただけで、アブラハムは通り過ぎませんでした。アブラハムが契約を守るのではなく、一方的に神がご自分の約束されたことを遵守されるのです。ですから、アブラハムに対する神の約束は、イスラエルについて彼らの不従順があるからといって反故にされないことが分かります。

それで、ここでもいけにえが屠られて、血が流されました。そして、それを祭壇に振りかけて、他は民に振りかけました。血を振り返るのですから、ちょっとエグイですね。けれども、血こそが契約を結ぶための印となるわけです。このことをヘブル書の著者が述べています。「ヘブル 9:18-22 ですから、初めの契約も、血を抜きに成立したものではありません。モーセは、律法にしたがってすべての戒めを民全体に語った後、水と緋色の羊の毛とヒソブとともに、子牛と雄やぎの血を取って、契約の書自体にも民全体にも振りかけ、「これは、神があなたがたに対して命じられた契約の血である」と言いました。また彼は、幕屋と、礼拝に用いるすべての用具にも同様に血を振りかけました。律法によれば、ほとんどすべてのものは血によってきよめられます。血を流すことがなけれ

ば、罪の赦しはありません。」

ここの最後の言葉が大事です、「血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」であります。アダムが罪を犯して、神がすぐに行なわれたのは皮の衣を着せたことでした。人の犯した罪によって恥が出てきた時に、それを覆うのは神ご自身で、家畜が代わりに死んだことをその皮は示しています。そしてすぐに、カインとアベルの供え物の話になります、アベルは羊の初子を自分の手で捧げました。血を流すいけにえです。神の前に出ていく時に、人は必ず罪の赦しが必要ならず、そのために身代わりに血を流す命が必要です。私たちが行いでいくら罪を償おうとしても、それはできないのです。

しかし、ヘブル書 10 章では、「雄牛と雄やぎの血は罪を除くことができないからです。(4 節)」とあります。旧約の時代の罪の赦しは、罪を覆うものでした。新約は罪を取り除くものでした。喩えると、レストランのテーブルに誰かが食べ物をこぼしてしまって、その白いクロスが汚れてしまいました。すばやくウェイトレスの方が新たに白い布を上にかぶせて、そのよごれた部分を覆いました。覆っているので見えないのですが、中にはその汚れがあります。これが、旧約における罪の赦しで、家畜のいけにえをいつも捧げなければいけなくなります。けれども御子の流された血は、罪を取り除くものであり、元々のクロスをクリーニング店で真っ白くするようなものです。イエス様が、「ルカ 22:20 この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」と言われたのには、これだけの重みがあるのです。

2A 神の栄光 9-18

1B 麓での食事 9-11

9 それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は登って行った。10 彼らはイスラエルの神を見た。御足の下にはサファイアの敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのものようであった。11 神はイスラエルの子らのおもだった者たちに、手を下されなかった。彼らは神ご自身を見て、食べたり飲んだりした。

契約を結んだ後に、人々は食事をしました。ヤコブがラバンと契約を結んだ後に食事をしたとありましたね。それで今、神との契約なので神の前で食事をするために、アロンと息子二人、長老七十人が上って行きます。

ここで驚くべきことは、神がそこにおられたことです。そして御足の下がサファイアの敷石のようなもの、透き通った大空のようなものがあるといえます。そうです、天に住まわれる主が近づいておられるのです。天が地に近づいています。私たちが神の住まわれる天を語っている時に、その天とはどういうところなのか、聖書はいくつもの箇所でも明らかにしています。そこには、青色や透き通った色の宝石の姿が描かれています。祭司の装束には、十二の石が胸当てに埋め込まれます

が、その一つがサファイアであり、またダイヤモンドです(出エ 28:18)。そして、エゼキエルが捕囚の地にて、ケルビムの幻に遭遇しました。その時の情景が生々しいです。エゼキエル 1 章です。

22 生きものの頭上には、まばゆい水晶のような大空に似たものがあり、頭上高く広がっていた。23 その大空の下で、その翼が互いにまっすぐに伸び、それぞれ一対の翼が彼らをおおっていた。それぞれの一対の翼が彼らのからだをおおっていたのである。24 彼らが進むとき、私は彼らの翼の音を聞いた。それは大水のとどろきのよう、全能者の声のようであり、そのどよめきは陣営の騒音のようであった。彼らが止まるときに、その翼は垂れた。25 彼らの頭上にある大空から声があった。彼らが止まったとき、その翼は垂れた。26 彼らの頭上、大空のはるか上の方には、サファイアのように見える王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。

ケルビムの上におられる存在が、このように大空があり、サファイアのように見える王座がありました。そして、黙示録 4 章において、ヨハネが天に引き上げられた時に、24 人の長老たちが御座の周りに座っていました。そして、「黙 4:6 御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった。そして、御座のあたり、御座の周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。」と、やはり水晶やガラスのような透明なところであることが分かります。そして新しい、天のエルサレムの情景です。黙示録 21 章です。

18 都の城壁は碧玉で造られ、都は透き通ったガラスに似た純金でできていた。19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド、20 第五は赤緋めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九はトパーズ、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。21 十二の門は十二の真珠であり、どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは純金で、透明なガラスのようであった。

サファイアの石があり、また透き通った大通りがそこにあります。これが天における神の御座の前に広がっている世界であり、この天に私たちが召されていることを覚えるのです。天を思うから、ペテロは「Ⅰペテ 1:8 ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」と言ったし、パウロは、「ロマ 5:2-3 神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。それだけでなく、苦難さえも喜んでいきます。」と言いました、苦難さえも喜ぶことのできるのは、神の栄光にあずかる望みを喜んでいるからです。そして、これは聖めにも重要です。「コロ 3:1-2 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。」そして地にあるものとは、「3:5 淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。」なのです。

ここに、「彼らは神ご自身を見て」とありますが、これはその栄光の反映の一部だけです。モーセも見ることができなかつたし、唯一、すべてを見たのは独り子の神、キリストのみです(ヨハネ 1:18)。しかし、今、血が流されて契約が結ばれて、その一部をイスラエルの長老たちも楽しむことができました。私たちは、キリストの流された血によって、信仰によって神を見ることができるようになり、天の栄光を仰ぎながら、神との交わりを楽しむことができるようになりました。

2B 山の上の雲 12-18

12 【主】はモーセに言われた。「山のわたしのところに上り、そこにとどまれ。わたしはあなたに石の板を授ける。それは、彼らを教えるために、わたしが書き記したおしえと命令である。」13 そこで、モーセとその従者ヨシュアは立ち上がり、モーセは神の山に登った。

さて、これから主はモーセに、幕屋についての教えを与えられます。25 章から 31 章までの長い教えです。そこで石の板も授けられ、そこにご自身の指で書き記されます。文字通り、神ご自身の言葉です。

それから、ヨシュアが従者と出ています。ここは英語では minister となっていて、しばしば牧師などに使われて、いわば「聖職者」や「教役者」と日本語では使われているのに相当します。けれども、実はかばん持ちみたいな「従者」なんですね。ヨシュアは後に、イスラエルを軍隊として率いる指揮官として動きます。人をよく従わせる人は、自分自身が従うことをよく知っている人です。治める人は、自分が治められていることをよく知っている人です。

14 彼は長老たちに言った。「私たちがあなたがたのところに戻って来るまで、私たちのために、ここにとどまりなさい。見よ、アロンとフルがあなたがたと一緒にいる。訴え事のある者はだれでも彼らのところに行きなさい。」

モーセが不在になります、40 日いなくなるのですが、この間に、大きな問題が起こります。アロンとフルと一緒にいるのに、訴え事を彼らが行いました。モーセがいないから、代わりに神を造れと要求したのです。それで、アロンはなすがままにさせました。ここが指導者としての大きな課題です。神にある正しさをもってしっかりと戒め、指導する力が必要です。

15 モーセが山に登ると、雲が山をおおった。16 【主】の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。17 【主】の栄光の現れは、イスラエルの子らの目には、山の頂を焼き尽くす火のようであった。

神の栄光は、雲の中で現れました。19 章もそうですし、40 章、幕屋が立てられた後も栄光の雲で満ちました。ソロモンが神殿をたてた時も、栄光の雲が宮に満ちたので祭司が奉仕できなくなり

ました。主が暗闇の中に住まわれるとソロモンは言いましたが、それは雲が濃かったからです。主が天の雲に乗って、戻って来られるという預言がありますが、まるで孫悟空のように考えてはいけません、それは神の栄光がシナイ山に降りたように、地上に世界中に降りて来るということです。

そして興味深いのは、これは物理的な雲ではなく、外から見ると焼き尽くす火のようであったことです。これも、数多くのところで神の栄光と臨在を示すのに出て来ます。イスラエルの民が荒野の旅をしている時に、雲の柱と火の柱でした。そして、先のエゼキエル書1章のケルビムの幻においても、火で燃えている天使の姿があります。ヘブル12章の最後に、「私たちの神は焼き尽くす火です。」とあります。主がそのようにして現れて、ご自分は清める方、裁かれる方、聖なる神であることを示しておられます。

六日間待って、七日目にモーセが呼ばれるというのは興味深いです。新約聖書で、高い山にペテロと、ヤコブとヨハネが呼ばれたのを覚えていますか？六日目に高い山に呼ばれました。そしてその高い山には、変貌したイエス様の姿があつて、それからモーセとエリヤがいました。モーセは、自分自身がそのようにしてシナイ山に上ったことを、もちろん覚えていたことでしょう。

18 モーセは雲の中に入って行き、山に登った。そして、モーセは四十日四十夜、山にいた。

四十日四十夜、山の中にいて、主から教えを受けます。興味深いことに、モーセの生涯には四十が多いです。その前に、ノアの時代の洪水が四十日、四十夜でした。そしてモーセは、40歳でエジプトを逃亡、80歳で召されて、120歳で約束の地の境にまで民を導きました。40、40、40という区切りです。そしてイエス様ご自身が四十日、四十夜、何も食わず、荒野の中を歩かれました。ここには、一つの流れがあるでしょう。試されるということでしょう。苦しむということもあるでしょう。裁かれるということもあるでしょう。しかし、イエス様が誘惑に打ち勝たれました。そこに希望があります。イスラエルの民は、金の子牛を拝んで偶像礼拝、自分の肉を満たす欲望に身をゆだねてしまいました。イエス様もご自身をサタンを拝む誘惑を受けましたが、それを退けられました。40日の試しを通られた方が私たちにはおられます。なので、イエス様は私たちの弱さを同情することができます、おりにかなった助けをすることができます。